

# 春宮の藏人宗正出家の話

—「今昔物語集」と「今鏡」—

高 橋 貢

一、

「今昔物語集」（以下「今昔」と略称する）巻十九第十「春宮藏人宗正出家語」を五段にわけて要約すると左のようになる。

一段：藏人宗正は春宮に信頼されていた。

二段：宗正の妻が死んだので遺体を棺に納めたが、恋しさにたえられず、棺のふたをあけた。すると髪は落ち、膚の色は変り、恐ろしい様子であった。

三段：道心が起こり、多武峰の増賀聖人の弟子になろうと思つた。家を出ようとするとき四歳になる女の子が袖を捕えて離さない。それをなだめて寝かせ、そのひまに抜け出した。

四段：増賀の弟子になって修行していると春宮から和歌を贈られた。感激して泣くと、増賀は怒って宗正を叱った。宗正は近くの増坊に隠れ、増賀の怒りが静まるのを待つて戻った。

五段：その後宗正は道心止むことなく修行した。

「今昔」巻十九の前半部は出家の原因になった話を主にして集めており、仏法部の中でも文学的価値の高い巻である。右の話もそれらの一話としてとり上げられている。右のうち二段は大江定基の出

春宮の藏人宗正出家の話 —「今昔物語集」と「今鏡」—

家話（巻十九第二）に類話があることは指摘されているが、他の段はこれまで出典は不明であり、同類話もないと考えられていた（考証今昔物語集、日本古典文学大系、日本古典文学全集等）。ところがこの話の類話がわりあいと読まれている作品中にある。即ち「今鏡」（「昔語」第九「真の道」）の中に見ることが出来る。「今鏡」の少納言統理とまりの話とまりを段にわけて要約すると左のようになる。

一段：少納言統理は年頃出家の気持があった。月明の夜、山に入りたいという意志が起こつた。妻に髪をけずる水を用意させると、妻にも夫の決意が伝わり、さめくんと泣いた。

二段：翌日、一の人道長にいとま乞いをする時、道長は数珠を与えた。

三段：増賀のもとに行つて出家したが、修行せず、悩んでいた。増賀がわけを問うと、臨月になつた女がいるということであった。増賀は都に上り、祈禱して子を産ませ、産後の始末までした。

四段：三条院から歌をたまわつた。歌を見て涙を流すと、増賀は「東宮から歌をもらつても仏にはなれない。」と叱つた。

右の諸段のうち、「今昔」一・二・三・五段は「今鏡」になく、

「今鏡」一・二・三段は「今昔」にない。また両書間に人物の出入りがあるので両書間の話に密接な伝承関係があるとはいえない。ただし宗正（または統理）の出家話ということでは共通点がある。特に「今昔」四段、「今鏡」四段（増賀の弟子になつてのち東宮から歌を贈られたので涙を流すと、増賀に叱られた。）は共通点が多く、類話（あるいは同話）といつてよい。なおこの部分を両書本文を出して対比する（「今昔」は日本古典文学全集―底本は実践女子大学所蔵本―、「今鏡」は日本古典全書―底本は畠山本―による）。

今昔：（前略）多武ノ峰ニ行テ、誓ヲ切テ法師ト成テ、増賀聖ノ弟子トシテ勲ニ行ヒテ有ケル間ニ、春宮此ノ由ヲ聞シ食シテ、極メテ哀ニ思シ食シテ、和歌ヲ詠テ遣ス。入道此ヲ見テ悲カリケレバ泣ケルヲ、師ノ聖人髯ニ此ヲ見テ、「此ノ入道ノ泣クハ実ニ道心発タル也ケリ」ト貴ク思テ、「入道ハ何事ニ泣キ給フ」ト問ケレバ、入道、「宮ヨリ御消息ヲ給ハセタレバ、和纒ニ、此ク成タル身ナレドモ、悲シク思エ侍ル也」トテ泣ケバ、聖人目ヲ鏡ノ如ク見成シテ、「春宮ノ御消息得タル人ハ仏ニヤハ成ル。此ク思テヤハ頭ヲバ剃シ。誰ガ「成レ」トハ云ヒシゾ。出給ヒネ、此ノ入道。速ヤカニ春宮ニ参テ坐シカレ」ト糸半無ク云テ追ケレバ、入道和ラ出デ、傍ノ房ニ行テ居タリケルヲ、聖人腹止ニケル時ナム、入道返リ行タリケル。此ノ聖人ハ極テ立チ腹ニゾ有ケル。立腹ナル替ニハ疾ゾ腹止ケル。極シク蜜ク際武クゾ坐カリケル。

今鏡…その統理、三条の院より歌の御返し賜はれりける、  
忘れず思ひ出でつゝ山人をしかぞ恋しく我もながむる

と侍りけるに、涙拭ひ侍りければ、「東宮より歌賜はりたらむは、  
仏にやはなるべき」と、聖、恥ぢしめ給ひけるとかや。奉りたる歌  
も、哀れに聞え侍りき。

君に人馴れな慣ひそ奥山に入りての後はわびしかりけり  
とぞ詠みて奉りける。

両書の話を対比すると、「今鏡」の方が歌に対して興味を持つて  
いる。一方話の迫力、迫真性という点からみると「今昔」の方が上  
である。また両書間の話には直接の影響関係も、他の文献を介在さ  
せた影響関係（いわゆる兄弟関係）もないと見るのが当然と思う。

なお「今鏡」の話は「発必集」巻五第七「少納言統理、遁世の事」  
の同話に影響を与えたと見られており、また歌は、「後拾遺和歌集」  
「雑三」にある。

## 二、

ところで「今昔」と「今鏡」とは内容、本文ともに親近性の高い  
話はないが、登場人物が一致する話や話の骨組の類似する話があ  
る。私の調査し得た話を左に掲げる。―なお話の要約、順序ともに  
「今鏡」に従う。

一、「すべらぎの上 第一 星合ひ」に中納言源頭基出家の話をと  
り上げる。即ち後一条天皇のお気に入りであった頭基は、帝没後  
皆喪に服して宮中の灯火をともし人もいないことを聞いて、悲しみ  
山に入った。頭基出家の話は著名な話であつて、栄花物語、袋草子  
古事談等諸書にとり上げられている。「今昔」は巻十九第十六「願  
基中納言出家受学真言」に表題はあるが、欠話である。「今昔」の

表題によると「今昔」の話には真言を学ぶ話が一部にあつたらしいが「今鏡」にはこの部分はない。

二、右の顯基出家話に続けて、顯基出家の先例として僧正遍昭の出家をごく簡単に「花山の僧正遍昭の深草の帝仁朝の御忌に御髮剃ろし給ひけむにも、おくれぬ御心なるべし。」と記す。遍昭の出家話は「今昔」巻十九第一「頭少将良峰宗貞出家話」にある。「今昔」の話は詳細である。

三、「藤波の中 第五 昔の衣」に少将公房が二条天皇没後出家したことを記す。この記事に続けて一・二でとり上げた顯基、遍昭の出家を先例として次のように記す。「花山の僧正遍昭の深草仁朝の御時、藏人の頭におはしけるが、夜屋馴れ仕うまつりて、諒閣になりなければ、悲しみに耐へずして、御髮剃し給ひて、昔の衣乾き難く、入道中納言顯基の後一条院の御忌に、帝を恋ひ奉りて、世を背きて、深き山に住み給ひけむにも、おくれぬ哀れさにこそ聞え給ふめれ。」

四、「藤波の下 第六 雁がね」に侍従大納言成通の話として次のような話を掲載する。即ち宮内卿有賢のもとにいた女房に每晚身分をかくして通つていたところ、邸の周囲を侍達が包圍して、出て来たらこらしめようと待ち伏せていた。成通は手薄な築地を簡単に乗り越えて出て行き、衣類を入れた袋を持って戻つて来た。翌朝、日が高く昇つてから直衣を着、指貫袴をはいて出て来た。侍達は始めいやしい侍か武士かと思つていたので、この様子を見て逃げまどつた。有賢も驚いて現われ、「どのような償いを見ましようか。」と言つと、「女房だけいただいて参りましよう。」と言ひ、女房を

春宮の藏人宗正出家の話 — 「今昔物語集」と「今鏡」—

車に乗せて連れて行つた。(なおこの話は尾張徳川黎明会所蔵本にある)。

人物は異なるが、女房のもとに忍んで通つたところ侍達が邸を囲んでこらしめようとした話は、橘季通にまつわる話として「今昔」巻二十三第十六「駿河前司橘季通構逃語」(同話は宇治拾遺物語にある)にある。類話とみることが出来る。

五、後述するように、「今鏡」は主に後一条朝以後の平安時代中後期の記事や話を掲載する。一方「今昔」は同時期の話は少ない。そこで両書間に共通する話が少なく、これまで研究者によつて「大鷲」と「今昔」の共通話の問題ほど両書間の共通話が問題視されなかつたことも納得できる。ただし「今鏡」の「昔語」には平安時代前中期の話を採用する。「昔語」と「今昔」との両者間には関連のある話、あるいは同一人物の登場する話が多いが、その理由の一つはこの点、即ち両者が採用している話の時期の範圍が重複していることにある。 「昔語 第九」と「今昔」との関連話は左の通りである。

1、「唐歌」に次の話を載せる。民部卿齊信が鷹司殿倫子の屏風の詩を選んだところ、日野の三位資業の詩が多く入つた。贈宰相義忠が「糸といふ文字、平声にあらず、僻事なり。」と言つて非難すると、齊信は白氏文集の詩を例に上げて弁護した。宇治太政大臣頼通はそのことを聞いて義忠を勸当した。

この話は「江談抄」巻五、「今昔」巻二十四第二十九「藤原資業詩義忠難語」に同話がある。三書を対比すると「今鏡」と「江談抄」、「今昔」と「江談抄」の間に親近性が強い。もし三書間に直接

の伝承関係があるとすれば、「今鏡」「今昔」の両書がそれぞれ「江談抄」から引用し、敷衍した形である。

2、前話に続けて次の話がある。即ち紫式部の父為時が県召して淡路守になった。為時は不本意のこととして女房を介して一条天皇に詩を献じた。帝は詩を見て夜の御殿に入って衣で顔を覆った。御堂道長はそのことを聞き、越前守にきまっていた国盛を辞退させ、代りに為時を任命した。

この話は「今昔」巻二十四第三十「藤原為時作詩任越前守語」に同話があるが、両者は細部で相違点がある。例えば「今鏡」では為時は始め淡路守になっているが、「今昔」では欠員がなかったので国司になれなかつたとする。なおこれらの点「今鏡」は「続本朝往生伝」「古事談」の方に親近性がある。

3、「昔語」の中で「真の道」の章は特に「今昔」と関連する話が多い。

最初の話は大内記の聖保胤の話である。この話は大きく二段からなる。一段は保胤が参内の途中、左衛門の陣の近くで女が泣いていた。主人の使で人から石帯を借りて帰る途中粉失したとのことであった。保胤は自分がつけていた帯を貸し与えた。二段は増賀が摩訶止観の一節を読むと感激して泣いた。始め増賀は殴りつけたが、のちには増賀も涙をこぼした。

保胤は「今昔」巻十九第三「内記慶滋ノ保胤出家語」に登場する。ただし採用している話は「今鏡」とは別の話である。なお「発心集」巻二第三「内記入道救心の事」にとり上げられている保胤の話は「今鏡」所収話と親近性が強く、「今鏡」からの引用とみてさ

しつかえない。

4、右の話に続けて三河の聖定基の話掲載する。定基の話は三段にわけることができる。一段は、三河守の時、任国で女が死んだ。遺体を片づけないで置いておく、次第に腐って行った。その様子を見て発心して出家した。都に上って乞食していると、元の妻に会った。妻は定基をいやしめたが、定基は「あなたのお蔭で仏になれます。」と言って喜んだ。二段は、前記の保胤や源信僧都に師事し、法華経注釈書に点をつけて読みやすくした。三段は、入宋後靈験をあらわして大師号を得た。臨終の時に詩と歌をよんだ。

右の一段は「今昔」巻十九第二「参河守大江定基出家語」にも同様の話がある。ただし「今昔」の話は「宇治拾遺物語」第五十九（巻四第七）「三川入道通世の事」にあつて、「宇治拾遺」との方が親近性が強い。「今鏡」一段の末に「伝へ語り侍る。」とある。このことから考えると一段の話は著名な話として元来人々の話に語られていたのかもしれない。一方「今鏡」の話は「発心集」巻二第四「三河聖人寂照、入唐往生の事」の同話に影響を与えたと考えられる。なお「今昔」「今鏡」「発心集」ともに保胤と定基の話を並べて掲載する。

5、定基の話に続けて、前述した少納言統理出家の話に掲載する。「今昔」巻十九に関連話がある。

6、統理の話に続けて河内守公経の前世話を掲載する。即ち公経が古寺を修理しようとして国内を見歩いていた。その時ある古寺の仏の座の下に「沙門公経」と署名した一文があった。見ると来世に国守になって寺を修理しようという願文であった。次話も大外記定

俊の前世話を掲載する。

この両話の同話は「今昔」にはない。ただし参考として卷十四第六「越後国々寺僧為猿写法花語」をとり上げることが出来る。この話は、越後の国寺の僧の法華経読誦を聞いた二匹の猿が人間に生まれ変わり、国司夫婦になって僧に再会し、写経を完結した話である。

この話の直接の出典は「大日本法華経験記」卷下第一二六であるが死後人間に生まれ変わって国司になった点、及び仏法話である点両者共通する。

六、「打聞 第十 敷島の打聞」に二話、「今昔」との関連話がある。

1、灯火の焰に、愛人の姿が映っているのを男が見た。女に飲ませようと、燃えかすをかき落として紙に包んで持っていたが、忙しさにまぎれて行けず、二日程たつて行くと女はすでに死んでおり、男に見せてほしいといって歌が残されてあった。

この話は諸注で指摘のように「今昔」卷三十一第八「移灯火影死女語」にある。「今昔」は男女の名前を藤原隆経、女御に仕える小中将の君と明記し、焰に映る影を見るのは男ではなく女房達としており、また描写は「今鏡」に比べて具体的でこまかい。これらの相違点からみて、両書の話は同一の話とはいえない。日本古典文学全集「今昔物語集」解説で「(両者の話は) 同原のものとは思われるが、「今鏡」の話は、より伝説的匂いが濃い。」と述べているが、「今鏡」の話の方が素朴である。

2、前記の話に続けて次の話を掲載する。即ち、男がしばらく無沙汰していた女の家の前を通って呼びとめられた。中に入ると女

春宮の藏人宗正出家の話——「今昔物語集」と「今鏡」——

は法華経を読んでいたが、七巻の「即住安楽世界」という所を何度も読むと息が絶えた。男は悲しさのあまりしばらく山里に隠れていたが、のちに出て来て宮仕えを続けた。

この話は「今昔」卷三十一第七「右少弁師家朝臣值女死語」にある。前話とは「今鏡」「今昔」ともに並べて掲載する。この点両者の話は近い伝承関係にあったと思われるが、人名や筋立て等相違点が多く、書承関係があるとは思えない。

七、これまでの諸先学の研究では佐藤謙三氏(「今鏡粗描」国学院雜誌 昭和四十五年十二月、日本文学研究資料叢書「歴史物語Ⅱ」所収)が比較的「今昔」「宇治拾遺物語」との関連について言及する。例えば「藤波の下」は、道長の高松殿系の子孫の物語である。和歌と芸能に関するものが多く、その点では「今昔」の卷二十四の構成に近い。「後拾遺」の歌に縁のある点も両者相通じている。」と述べる。

「今鏡」と「今昔」に共通する構成や関心があるかないかを探ることも大切である。共通の関心があるとみられる記事や話の中では例えば道長関係の記事、話についていうと、両者とも上東門院彰子と法成寺関係の記事、話が多い。「今鏡」では「すべらぎの上 第一」の「雲井」「子の日」で彰子出家や無量寿院建立供養の記事を掲載する。「今昔」では卷十二第二十二「於法成寺繪像大日供養語」、第二十三「於法成寺薬師堂始例時日、現瑞相語」卷二十四第十三「公任大納言、読屏風和歌語」、第四十一「一条院失給後、上東門院読和歌語」、卷二十七第二十八「於京極殿有詠古歌音語」に彰子と法成寺関係の話を掲載する。彰子と法成寺に関心を持つのは

この両書だけでなく、栄花物語、大鏡等他書でも同様なので時代性と考える方がよいが、一応の参考にはなろう。一方村上源氏に対しては関心の持ち方が相違する。「今鏡」は「村上源氏 第七」で村上源氏を大きく扱う。村上源氏は平安時代後期に伸張する。たとえば賢子は白河院妃で堀川院母になっており、白河院政期には俊房、頼房、師忠、雅実等が公卿の座に列する。ところが「今昔」は卷二十八第二十五「彈正頼源頼定出閣被咲語」の一話だけしか村上源氏の話はない。村上源氏に対する両者の関心の違いはどこから来たのであろうか。興味のある問題である。(なおこの問題は本詩前号でも指摘した)。

### 三

前述したように、「今昔」と「今鏡」との間には直接影響関係を見出せる話はない。もともと近い伝承関係にあるとみられる五の場合でも、他の文献を介しての間接的関係(いわゆる兄弟関係)である(ただしこの場合も江談抄からの影響関係が否定されれば別である)。他の話の場合は同話といっても、間接的関係にせよ書承関係にあるとは認められない。

ところで本論文で「今昔」と「今鏡」との共通話の指摘、それらの話の親近性や伝承関係の問題をなぜ扱ったのかというと、これらの問題を追求することによって「今昔」の成立問題に対して一視点を提供できるのではないかというささやかな望みからである。今日「今昔」関係の論文の中で大鏡との共通話をとり上げたものはあるが(国東文磨氏「今昔物語集成立考」等)、「今鏡」との共通話を

対比し、追求することによって「今昔」の成立問題を考えた論文はほとんどない。

ところで周知の通り、「今鏡」はその序から「大鏡」の内容を書き継ぐことを意図しており、また「栄花物語」を意識した箇所も多い(「平安朝文学事典」今鏡の項、他)。そこで「大鏡」「栄花物語」等諸書の影響があるのは当然である。また「定信の君は人に語られる。」(藤波の上 第四 波の上の杯)、「その入道定信は人に語り待りける。」(藤波の中 第五 水壺)、「折節いと優しく待りけることかなとこそ伝へ承りしか。ひがごとくにや待りけむ。人の伝へ語りしことは知り難くぞ侍る。」(藤波の中 第五 使合)、「……とぞ人の語り侍りし。」(御子たち 第八 花のあるじ)等の例から、人の語った話を採用した場合もあったであろう。ただし「今昔」との関連話は何の資料によったのか、人々によって語られた話を採用したのかは明らかではない。

それではこれらの関連話がどのような人々によって元來伝へ、語られていたのか全く明らかではないのかというと、そうともいえない。ここで「今鏡」の作者がだれかについて考えなければならぬ。今日作者として寂超が有力視されている。寂超は出家して大原に入っている。大原は比叡山の別所で、良忍の大原入り以來特に念仏聖人達の出入りが盛んになった(井上光貞氏「日本浄土教成立史の研究」)。日本古典全書「今鏡」解説によると、「今鏡」には天台関係の記事が多いとのことである。叡山僧も登場するが、中でも寛勝僧都は説法の上手として扱われている。その説法の様子について「天台大師の経を釈し給ふに、四つの法門にて、始め「如是」より

經の末まで、句毎に釈し給へば、その流れ汲まむ人、法を説かむそのあとを思ふべければとて、初めには、因縁などいひて、様々の阿弥陀仏を説きて、昔物語説き具しつゝ、「何事も、わが心より外の事物やはある。事の心を知らぬはいとかひなし、朝夕に外の宝を算ふるになむあるべき」など説き給ひしを、思ひかけず承りしこそ、世々の罪も滅びぬらむかしと覚え侍りしか。」(村上の源氏 第七堀河の流れ)と記す。このことから考えると、「今鏡」には天台系の僧侶によって語られた話、伝えられた話、あるいは書かれた資料によつたものがあつたかもしれない。「今昔」との関連話のうち特に「昔語 第九 真の道」掲載話の場合は、五話のうち三話の人物が「今昔」巻十九に登場する。三話のうち前記五の3でとり上げた保胤の話は「今昔」巻十九第三に採用する。「今昔」の話は前述のように「今鏡」にはない。ところで「今昔」の話を便宜上段にわけると、a、紙冠をして被をしていた法師陰陽師の紙冠を破り捨てた話、b、六条院に行く途中、乗った馬の尻を手綱取りの男が打つと「前世の父母をなぜ打つのか」と言つて怒つた話、c、道の側の卒塔婆を見るたびに馬から下りて礼拝した、d、犬に餌をやると他の犬が来てけんかを始めたので、驚いて板敷に上つた話である。aは「宇治拾遺物語」第一四〇(巻十二第四)、bは「発心集」巻二第三、cは「撰集抄」巻五第三(三十六)にそれぞれ同話がある。このことから考えると、a、b (c)、cの各三段は、日本古典文学全集「今昔物語集」解説の通り、元來別々に伝えられていたか、あるいは書きとめられた資料があつたのであろう。次に五の4でとり上げた大江定基の話は「今昔」巻十九第二にある。「今昔」の話は

春宮の藏人宗正出家の話 — 「今昔物語集」と「今鏡」 —

a、三河守として任国にいた時、愛人に死なれて発心した。次に生きた雉を料理するのを見て都に上り出家した。b、乞食していた時元の妻に会つてはずかしめられたが、定基はかえつて喜んだ。c、入宋の前に子を比叡山にたずねた。d、入宋し、帝の前で鉢を飛ばして僧供を得た。e、入浴していると、でき物のある女が入つて来た。女は文殊であつた。この諸段のうちa、bは「今鏡」に同話があるが、「今昔」は「宇治拾遺物語」第五十九(巻四第七)との方が親近性が強い。dは「宇治拾遺物語」第一七二(巻十三第十二)に同話がある。c、dは出典、同話ともに不明である。五の5の宗正の話については前述した。

以上のことから、三話ともに「今昔」「今鏡」の双方は同一の文献、または同一の伝承源からとつた形跡はない。ただし保胤の話の場合、三段の話ともに別々の資料、あるいは伝承源によつたものである。また定基の話もa、b、d各段は「宇治拾遺物語」に同話があるが、他の段の同話は不明である。特にcは定基が比叡山に登つて子と別れる話である。これらのことから考えると、「今昔」の話のあるものは、「今鏡」と同一の伝承源によらなかつたにせよ、天台系の僧侶によつて元來伝えられ、あるいは書きとめられていたものがあり、それを資料にしたのではないかと思う。しかも三話の主人公ともに天台に関係のある聖人達である。

本論文で私が最後に述べたいことは次の通りである。即ち、「今昔」の撰者がどのような人(俗人か僧か、天台系か他系)であるかはわからないし、「今鏡」と対比すると両者間に関心の違う点もある。ただし「今鏡」との同類話を対比し、「今鏡」の作者を参考に

することによって、「今昔」の話が天台系の人々によって伝えられるいはそれらの話を書きとめた資料があつて、それらを素材の一つとしていたと考えることができる。ただし「今鏡」との同類話の中に伝承源の明らかでない話があるので、「今昔」の撰者が話の素材を天台系の伝承源だけに求めたと限定できないことはもちろんのことである。

「注」 以前「学生社」主催のシンポジウムで、益田勝実氏が「今昔」は「今鏡」から直接の影響を受けていないと述べられたことがあつた。